起　意　表　明

市長選挙を終えて

私が市議会議員選挙に初めて立候補をする前年の平成二年四月には村上市長選挙が有りました。当時、現職で二期目を目指す若林久徳市長の再選に向けて私達は運動をしていた。その頃から友人、知人より次の市議会議員選挙に立候補を薦められ、自分では挑戦したい気持ちと三十三才で家業を継ぐ自分自身の環境の中で決め兼ねておりました。無事、若林久徳市長の再選も決まり町の中も平静を取り戻す中、私の周りでは若林市政が二期目の課題にどう取り組むのか活発に議論されるようになっていました。そんな中、当時私が参加していた中央商店街、商工会議所青年部、青年会議所等で議論していた「まちづくり・ひとづくり」運動の実践の為、私も行政、政治に大きく関わりたいという想いが徐々に強くなっていったのを覚えています。

政友との出会い

平成二年の六月頃と思ったが市長選挙で共に運動していた土居光夫氏が夫人を伴って当時、駅前にあった村上プラザを訪れた。私は売り場に出ている時で声を掛けられ、土居氏の市議選立候補の決意を聞き更には私に翻意を促され、もう運動に入ると聞きびっくりしたものだ。実は土居氏とはそれまで選挙の応援では一緒になるが彼は選挙期間中の街宣車の隊長を務める花形カラス、私はビラ配りの兵隊で一緒になるのは選挙期間中の朝の朝礼位で話しも殆んどした事が無い人であった。しかし、村上プラザで声を掛けられて以来、今日まで同士から同志として政治行動を共にし、市議会の中では何でも議論できる政友として付き合いをさせて貰ってきた。

自分の死亡記事を書け

お陰様で私にも同級生を始めとした大勢の先輩、後輩達、そして友人や親戚が村上市、岩船郡に居ります。皆さんから激励や心配を頂く中、八月に入っても決め兼ねている私を同級生の一人が声を掛けて来ました。私の周りには年代に関係なく個性的な性格を持ち、村上の中では結構と有名な方が多く居ると思う。今、思えば私が一番目立たず個性が無かった様に思えてならないくらいだ。その同級生もまた特別個性の強い男であった。それは磯部正宏氏（故人）で仲間の中でも独創的な考えを持ち行動力の有る頭脳明晰な男である。時代を読み取るのが早過ぎて事業家として常に新しい事に挑戦し、そのものが一般に認知される頃にはもう次の事業に取り組んでいるような男であった。その磯部氏から連絡が有り、居酒屋で川上伊登志氏と三人で会う事になった。居酒屋で三人は、村上市岩船郡のまちづくりについて語らい、青年会議所運動の実践の為にお前は市議選に出るしかない、何故かそんな話しになっていった。川上氏は我々の青年会議所の先輩であり、非常に理論的

な方であった。その後、彼が子供達だけで寝て居るので家に帰り泊まりがけで飲もうと言う事になり磯部氏の自宅へ行き二人で語りあった。そこで彼に言われたことが重陽、もし「お前が死んだ時に記事にしたい自分の死亡記事」を書いてみろであった。自分が死んだ時、どんな道を歩いて来たのか、どんな生きざまで在りたかったのか。それが書けたら今、自分の向かう方向は決まって来ると言われ、酒の勢いも手伝い自分のこれからの生き方を自分の頭の中で描き、よしっ今こそ俺がみんなの為に村上市を変える時だ、などと勝手に思い上がり翌年の市議会議員選挙に立候補すると言ってしまった。それなら最初、家族に気持ちを話して理解を得なくてはいけない。先ずはカミさんの了解を得るのが先決と思い、夜中三時頃に自宅へ帰り説得することにした。

頑張って

家に帰ると当然カミさんは寝て居たので起こし枕元で話す事にした。寝ぼけていたこともあったのかもしれないが、私の市議会議員選挙への立候補の気持ちと決意を伝えても驚く様子も無いし特に反応も無く聞いているだけで、何か私は肩透かしをくらったような気分であった。私が念押しするように立候補することに了解してくれるか確認したら「分かったから頑張って」であった。カミさんにしてみれば選挙で家族に及ぼす影響がどんなものかという事は、その時点では知り得なかったようである。選挙となれば旦那は朝から晩まで飛んで歩き、家にいないのが彼女の考えている選挙であったようだ。事実、私は人の選挙を手伝う事になると仕事の約束でも無い限り日中は店にも家にも居ないのである。選挙期間に入ると家に戻るのは風呂と着替えくらいであった。余談になるが、若林久徳氏が昭和六十一年四月の市長選挙に初めて立候補することが決まり、正月早々から後援会を立ち上げ活動を始める事になった。当時、カミさんのお腹には長女が宿って居り、間もなく出産を控えていた。毎日、毎晩、私は事務所に詰めており大変不安な思いをさせたようである。二月二十五日に無事長女が誕生したが産後はなお更、人手が要るので実家に戻し面倒を見て貰おうと考え退院後二人を村上市宿田の実家に連れて行った。市長選挙が終わるまでには、まだ二カ月程期間が有り、終わるまで預けようと思っていたのである。しかし、預けて一ヶ月位も経つとカミさんから電話が入り、たまに子供の様子を覗きに来いと云うのである。あまり行かないので義母が私は男子出産を期待していたのに女子が誕生し、子供に愛情を感じていないのでは無いかと心配していたようである。私とカミさんにとっては、ただ単に助かっていたつもりであったが、周りにとっては初めての孫なのに父親は何を考えているのか不安を与えたようだ。私の親にしても早く初孫を抱いてみたくて顔を合わせると母親に口説かれていました。カミさんにしてみれば私が選挙に立候補するというのは、そのような延長線上の出来事であり、今まで以上に家に居付かない位の想像をしていたようだ。お陰で後にカミさんは大いに後悔をする事になるのだが。

悪い事では無いのだが

次に私の両親に話しをして理解を得なくてはと思ったので、カミさんに話した日の夕方に当時住んで居た長井町の家に集まって貰い、市議会議員選挙立候補への気持ちを伝えた。当然だが二人とも困った様子で、特に親父は私が昭和五十三年に稼業に入り十二年が経ち、その頃事業の交代を考えていた。後は母親と二人で自分の趣味を仕事にしたいと準備していた時期なので悩ませてしまいました。悪い事では無いのだが、事業はどうするのか、幼児を二人も抱え生活は大丈夫なのか、親としては不安でならないようでした。しかし私は、無理して家業と掛け持ちして頑張れるのは、気力も体力も旺盛な三十三才という年齢を持つ今しかないと思い決意した事などを話し、両親の心配は残りながらも理解して貰った。まだ二人とも元気で居るが、以来、親不孝の連続かもしれない。

体制を整えて

家族の了解を得たところで早速、同級生を始め先輩、後輩達を中心とした友人に集まって貰い、今後の進め方について相談した。後援会を立ち上げ体制を整える事になり事務方と運営については斉藤与志守先輩と小田正彦、佐藤睦の両氏が同級生を代表して当たってくれる事になった。最初の私に与えられた使命は後援会長を決めることでした。そこで町内の先輩であり町の有名人でもあった加藤悦郎氏(現、田村酒店当主)にお願いしたいと言ったら、皆が賛同し即座にお願いに上がる事になった。そして、加藤悦郎氏に気持ちを話したところ大きな励ましと支援を頂く事になった。しかし、加藤悦郎氏も当時は四十九才とまだ少し若く、自身が受ける事は容易いがもう少し先輩にお願いしようと一緒に歩いてくれた。これが良い選挙運動になり大勢の方にご支援を賜る結果となった。最終的には候補者が若いのだから後援会長も若い方が良いとの事で加藤悦郎氏に納まって頂き、未だお世話になっている次第である。また友人達は後援会組織を立ち上げる為の人集め、人探しに奔走してくれた。この頃すでに九月に入っており、十月中に起意表明と後援会事務所の立ち上げをする事に決めて皆が動いてくれた。有り難くて、有り難くて、それまで以上に人の情の有り難さを知り、感謝の二文字でした。

事務所を構える

後援会事務所を立ち上げる事になり上町に当時、遠山精肉店さんが店の隣に所有していた建物の二階が空いていたので、お願いをして選挙が終わるまでの半年程の間お借りする事になった。とても広く、友人達に建具や設備の設えを整えて頂き、大変立派な事務所が出来上がり運動の拠点として使わせて頂いた。

挨拶回りとミニ集会

みんなの力を借りながら毎日、挨拶回りを続けていた。回りながら皆さんに激励を頂き、様々なご指導やご意見を賜わりご支援頂いた。年も変わり、平成三年に入ると家族、親戚の皆さんも連日のようにパンフレットを待ってお願いに回ってくれた。特にカミさんには、

私の選挙責任者である石井忠直氏が付き添い毎日挨拶回りをしていた。石井氏は私が今でも尊敬する故稲葉修先生の秘書を長く務めてきた方で「選挙は足で稼げ」が持論であり、カミさんを連れて実践して下さった。お陰でカミさんは毎日ヘトヘト、初めて選挙の大変さと、支援者の心の有り難さを知る事になった。また、皆が呼び掛けて同期生、町内、有志の皆さんに集まって頂き、私の集会、座談会などを開き運動の輪を広げていった。毎日の運動を終えると事務所に集まり、頂いた意見や要望を基に皆で村上市の現状への不満や将来への希望など議論は盛り上がり明日への活力になっていた。

珍！事件

また余談になるが選挙の告示まで、あと一か月程残した三月下旬、運動を終え事務所で打ち合わせをしていて、お腹が減り三人で居酒屋へ行くことになった。午後十一時頃と思ったが、店に入り玄関に近い小上がりに座り、軽く飲んでラーメンでも食べて帰るつもりでいた。するとそこへ七,八人の見るからに暴力団と判る連中が入って来た。中に地元の人間も居たようで、我々の処に寄って来た。私の連れの一人が気を利かせて店の奥座敷に案内して同席する破目になってしまった。仕方なく二人で飲んで居ると、そこへ時をずらして一番質の悪いのが酔って店に入って来た。現れるなり私達の脇へ座り込んで、私に自分の所へ挨拶に来ないのが気に食わないと突っ掛かって来たのだ。仕舞いには本人曰く、中国製トカレフなる拳銃を取り出し、私の友人に向かって引き金を引いて来たので私も驚き注意した。しかし、弾は出なかったので安心して居ると、今度は私に向けて引き金を引いて来た。何度か引き金を引いたが弾が出ず本人は尚の事、怒り騒ぎだす始末だ。しかし、お陰で奥に居た仲間が気づき、慌てて連れて行ったので事無く終えた。今、盛んに中国製食品のずさんな製造管理による不良事故が問題になっているが、私の場合は中国製が逆に幸いしたと思っている。日本製なら不発など考えられない事で、今思えばぞっとする出来事であった。この事に関しては後日、選挙が終わり五月の中頃になって、新潟東警察署の刑事が二人で訪ねて来られた。他でも同じような騒ぎを何件か起こしたようで、通報が有り警察で捜査を進めているとの事。しかし、被害を受けても被害届を出してくれる人が居なく捜査令状が取れず困っていた。どこかで私の話しを聞いたらしく、私に被害届を出すようお願いに来たのであった。私は了解し、その後二日間に亘り事情聴取を受ける事になった。裁判所から無事捜査令状が取れ家宅捜査に入る事が決まり、私に刑事からお礼の電話まで頂いたが、時間がかなり経過していたせいか拳銃は出てこなかったとの事。

いざ出陣！

平成三年四月十三日いよいよ告示を迎え、私を含め新人七名が加わり選挙戦がスタートした。朝の必勝祈願祭で馬下の井上武先生(宮司)に読んで頂いた祝詞に感無量になった事を今でも覚えている。選挙の街宣車が走り出したら、後の事はどんな風になっていたのか私自身は分からず、同級生、友人達が選挙戦を指揮してくれた。私は選挙期間中、加藤悦

郎後援会長と共に街宣車に乗り込み二人で街頭演説に立ち、お願いと自分の想いを演説して回った。何台か連なる車には、上町の皆さん、同級生を始めとした友人達、私を可愛がってくださる先輩・恩師が毎日交代で乗り込み支えて頂きました。選挙事務所もその皆さんが集まり盛り立ててくれました。また、選挙事務所での昼飯時、夕飯時には新町の斉藤フミ子さんを中心に上町や親戚のご婦人の方々に食事の用意をして頂き、皆が状勢分析などをしながら賑やかな食事を取り、ホットするひと時を与えて貰い有り難い限りでした。選挙運動最終日の夜、最後の街頭演説を上町の田村酒店前で行い、集まって下さった皆さんの前に挨拶に立った時には、集まった皆さんの温かい励ましの中、やっと長かった運動が終わったという安堵感と、やれる事はやって来たという思いが込み上げ、胸がいっぱいになっていました。あとは「人事を尽くし天命を待つ」という心境がこの時、初めて身体で感じ取れた時だったと思います。

めでたくバンザイ！！

四月二十一日投票日は朝から力が抜けボーッとしてしまい、昼前にやっとカミさんと二人で投票に行って来ました。途中多くの方に激励を頂き、改めて緊張感に包まれたものでした。午後からは皆さんが徐々に集まり、選挙事務所を夜の開票会場に模様替えしたり、街宣車の解体をしながら夜に備えました。午後七時の開票が始まる頃から事務所に人が集まりはじめ、九時を過ぎた頃には百人近い人が集まっていました。そのころ私は事務所で集計している部屋に籠もり待機させられて居ました。昨夜には票読みで千百五十票を予測したものの、私を始め皆さん実感が湧かず、期待と不安が交錯し時間の経つのがもどかしく感じたものです。しかし、九時過ぎに当選確実との開票所からの連絡が入り、九時三十分の開票速報を確認してからバンザイを行った。十時を過ぎた頃にはトップ争いをしている事が判り会場はえらい盛り上がりを博した。最終は千三百二十九票でトップ当選を果たす結果となり会場のあちこちでバンザイが響いた。その後は、皆さんから頂いた酒で祝杯を上げた事は覚えているが、最後どうなったのか定かでは無い。翌日に当選証書を二日酔いで貰い受けた事だけは記憶にあるが。